



## 「わたしたちは子どもに何ができるのか」

H29. 12. 21 住小：坂井

「子どもと付き合う」というテーマで、そのときどきの学校の諸活動と絡めたりしながら、教育に関することを考えてきました。きっかけは、「福井県で起きた、担任等の厳しい指導や叱責で生徒が自殺した」とされる報道でした。教師も親も「子どものため」に一生懸命にやっている「はず」ですが、もしかしたら大事なことを見落としてはいないか、そんな問題意識からスタートしました。「指導」や「躱」は大切なことだが、子どもにとってはそれらはどのように映るのか。子どもと大人は対等ではないし、そうあってはいけない部分もあるが、子どもがよい環境のなかで安心して育ってほしい。そのようなことを思いつつ、「子どもと付き合う」というテーマで考え始めました。これまでの5回のタイトルを再度掲げてみます。

- ① 「傾聴」～子どもとの関わりで大事にしたいこと
- ② 「付き合う」とは、一緒にいて楽しむこと？
- ③ 大人が「束になって」子どもと付き合う
- ④ 多くの友だちの名前を覚え、名前を呼ぶ
- ⑤ 子どものモデルになりたい

このように「子どもと付き合う」を書いているときに、本屋でふと手にした本が、「私たちは子どもに何ができるのか」(ポール・タフ著、英治出版)でした。日本語のまえがきにある次の言葉を目にして、「これだ」と思ったのです。引用します。

近年、教育分野では「**非認知能力**」の育成に高い関心が集まっている。子どもがよりよい人生を歩むうえで、これまで重視されてきたIQや学力などの「認知能力」よりも影響力が大きいことが、明らかになりつつあるからだ。

非認知能力とは、**ひとつのことに粘り強く取り組む力や、内発的に物事に取り組もうとする意欲**などを指す。

確かに、世の中で活躍している人は、どの分野でもこのような力が備わっているように思えるし、保護者の皆様もお子さんの「やる気」に大きな関心をもっていらっしゃると思います。この本の著者はアメリカ人です。アメリカの家庭や学校についての調査や社会実験をもとに、非認知能力の向上に関する具体例が書かれています。

ここで本の内容を詳しくは説明できませんが、結論として、三つの提案が示されているので、内容を要約してご紹介します。

### 1 政策を変える

- ・教育にかける予算、幼少期のケアと教育のシステム、教員養成、児童生徒への規律の教え方等、国や地方公共団体の仕事を中心となるが、よい政策が生み出されるために、私たちが関心をもち意見表明していくことも大切だ。

### 2 大人が行動を変える

- ・よりよい環境をつくり出すプロジェクトは、根本的に個人の仕事だ。教師、コーチ、親などが行動を起こす。親の声の調子、教師が子どもにかけると一言、難題に直面した子どもの話を聞くこと等、それぞれの立場で大人が行うことはたくさんある。

### 3 大人が考え方を考える

- ・逆境にある子どもたちを手助けして困難な環境を乗り越えさせることは難しいが、大人全員ができる仕事である。

さて、今学期も残すところ明日一日となりました。今回は書籍をもとにした話になりましたが、目の前の子どもたちや学級の様子を見ると、これからの教育を考えるうえで参考になることがたくさんあることに、改めて気付きます。昨日（12月20日）の様子を、写真でお届けします。（日ごろの学校生活の一コマですが、非認知能力向上に役立つと思うのです。）



学習のまとめ



お楽しみ会



床磨き



ドッチボール大会

目の前のことにがんばらせること、所属感を高める活動をする、教師が個別に声がけすることなどは、どれも大切にしたいことです。

さて、いよいよ今週末から冬休みに入ります。各ご家庭で計画されていることにも、お子さんの育ちにつながるものがたくさんあるものと思います。通知表を始め、学校からの様々な文書にもヒントがありますので、参考にさせていただければ幸いです。

3学期に向けて、今後も「子どもとのよりよい付き合い方」や「子どもたちのためにできること」を、保護者の皆様と一緒に考えまいると思います。どうぞよろしくお願ひいたします。1年間ありがとうございました。よいお年をお迎えください。



